

『人々が集い、つながり、夢が広がり、

りんご並木の心が育まれ、

自然、文化、歴史が息づく結いのまち・いいだ』

15年後の賑わう中心市街地への市民提案 Ver-4.3

令和5年5月11日

中心市街地を考える会

南信州アルプスフォーラム

目 次

〈はじめに〉 15年後の「なりたい未来」「あるべき姿」を創造する	P3
1. 新しい中心市街地の創造	P5
2. 中心市街地の将来像	
1)リニア中央新幹線駅とのアクセスと交通利便性の確保	P6
2)まちなかMICEと賑わいの創出	P8
3)タウンキャンパス～学びのまち	P11
4)若者から老人までが暮らすまち	P14
5)多様な、独自の食文化が味わえるまち	P14
〈おわりに〉	P15

<はじめに>

15年後の「なりたい未来」「あるべき姿」を創造する

2027年の予定であったリニア中央新幹線の開業時期は、今もって確定しておりませんが、駅周辺やアクセス道路の工事は進められております。また、三遠南信自動車道の開通も見通せておりませんが、工事は各所で行われております。これらのことは、飯田下伊那の地域を大きく変える100年に一度の出来事であることに変わりはありません。どのような影響が飯田下伊那にあるのか、人々の気持ちがどのように変わるのか、まだ誰もが正確にリニア後の飯田下伊那を予想できていないのが現状です。飯田下伊那がリニア中央新幹線によりメガポリスの東京や名古屋の近郊として結ばれることにより、飯田下伊那が東京や名古屋の一部（いわゆるスーパーメガリージョン）として機能し始めることとなります。大いなるチャンスであると同時に、私たちは、大都会（＝大資本）の波に溺れないように、素通りされないようにでき得る限りの準備をする必要があります。

リニア時代は、現代とは全く様相が異なります。私たちが“地方人”という言葉に甘えていられる時代はもはや過ぎ去りました。地元の実情だけで都市計画を考えるチームは終わりを告げております。私たちは、リニア中央新幹線開通を踏まえ、地方人でありながら、“都会人”の感覚や思考、嗜好を持ち合わせる必要があります。これからのまちづくりにもそれらを反映していかなければなりません。ただし、都会と同じ土俵で戦うことや、都会にあるものをこの地に欲することはリニアの時間距離を考えると徒労と言えます。この地にあるヒト（人情）、モノ（地形、自然）、コト（技、暮らし）、そしてジョウハウ（伝統、伝聞、歴史）を最大限活かす考え方を明確にしなくてはなりません。

飯田市では5年区切りの中心市街地活性化基本計画を策定し、現在は第3期計画が進められております。中活計画は現状を把握した上で問題点や足りない部分を抽出し、改善を施して来ました。これは一定の成果を出し、全般に飯田らしい地に足の付いた方法であったとも言えます。さらに飯田市は、昨年、南信州広域連合中部ブロックのビジョンとして、3重心による機能と構造のまちづくりを打ち出しました。リニア駅を核として産業の集積や研究開発・人材育成の機能を果たす「交流重心」と、市民生活を支える居住や商業機能等を担う「人口重心」と共に、行政機能、まちなかMICE機能（飲食、宿泊、会議等）、文化活動の拠点機能等多くの都市機能が集積し、当地域の中心拠点としての「都市重心」として、中心市街地を位置づけました。

リニア時代の飯田下伊那の将来を考える時に、飯田市全体からの中心市街地の役割を明確化し、都市重心である中心拠点と交流重心、人口重心並びに地域拠点との連携による飯田市の明るい未来を描き出すことが求められておりますが、現時点では、このまちの方向性の共有や具体的な準備は、十分ではないと考えます。今後、市民も含めた総合的なまちづくりの計画を立案し、推進することが求められております。

私たちは、2018年、南信州アルプスフォーラムとNPOいいだ応援ネットアイデアを核とした中心市街地を考える会で、過去の提言を振り返り、知恵や知識、アイデアを持ち寄って、今可能な限りの創造をし、20年後の飯田市中心市街地の「なりたい未来」を、「あるべき姿」を発表しました。その際、1999年に発表をお聞きしたピーター・カルソープ氏*1の飯田市のまちづくりの指針「NEXT100～サステイナブルタウンの創造『住み続けられるまちの再生』」を読み直すことから始めました。

その内容を振り返ってみますと……

[中心市街地は]

- ・江戸時代から飯田城を中心にした小高い丘の上に城下町が整備された。
この地方の政治、経済、文化の中心として重要な役割を果たしてきて、人々は親しみを込めて“山都”と呼んでいる。

[中心市街地が抱える構造的な問題点]

【1999年の指摘】

- ・道路のつながりが悪い
- ・駐車場が少なすぎる
- ・電車の衰退
- ・商店街が商多すぎる
- ・公共施設の分散化
- ・何かが起きるかもしれない期待感
- ・安全で快適に住み続けられる街
- ・街に流動性が無い

【現在では？】

- ⇒羽場大瀬木線の開通
- ⇒市営駐車場2時間無料
月ぎめ駐車場が増加し、点在
- ⇒リニアの開業と公共交通の整備が期待される
- ⇒各街の個性化以前にシャッター街化
- ⇒分散したまま
- ⇒若者の参加意識が生まれる仕掛けが必要
- ⇒高齢化、店舗の閉店による日用品の買い物困難者が増加
- ⇒空き家、空き地利用が進まない。

約25年前の提案書は、預言書とも感じられるもので、その後の25年間のまちづくりに連続性として活かされているかを、私達は冷静に分析した上で、今後の20年間のまちづくりの指針を検討、提案し、2021年に一部を修正し、再提示しました。その後、2022年には、丘の上結いスクエアがオープンし、南信運転免許センター(仮称)の場所が現在の飯田警察署周辺に決定しました。新飯田文化会館整備検討委員会による検討が継続中であり、旧市5地区のまちづくり協議会での取り組みも進められております。私たちも旧市5地区やアイデアの関係者にも勉強会への参加を呼びかけ、改めて勉強し、考える中で、中心市街地に対する提案を見直す必要性を認め、再度修正を加えました。そして、2018年の提案から5年を経過していることから、15年後への提案として提示いたします。

この提案が飯田市中心市街地のまちづくりの羅針盤として、官民協働で活かされ、今後具体化につながっていくことを願います。

1. 新しい中心市街地の創造

飯田市は合併により多くの地域から構成される市となりました。それぞれの地域にはそれぞれの役割や個性があります。飯田市の中心市街地はまさしく飯田市の核として、その役割を果たさなければなりません。

顧みるに戦後のモータリゼーションの到来とそれに伴う住宅地の郊外化は、農地を宅地化し、街を広げ、学校の郊外移転をもたらし、モータリゼーションへの対応が簡単ではなかった地方都市の中心市街地を疲弊させました。もちろん、飯田市も例外に漏れず、中心市街地は人通りが激減し、商店街はシャッター街とも言える状態と化しました。

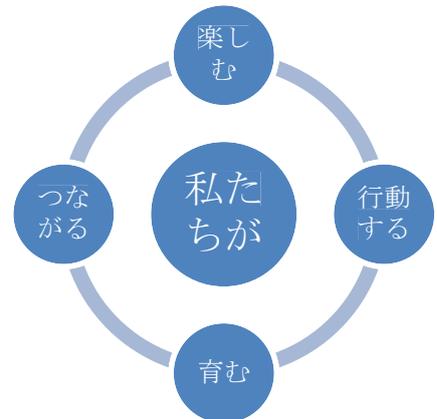
しかし、飯田市の中心市街地は2つの大きな転換期を迎えており、この危機を好機に替えていくことができます。1つは人口減少に伴い、拡張した街を集約するコンパクトシティ化の流れであり、もう1つはリニア中央新幹線の開通です。

ここで私たちは、前提となる中心市街地に対する基本的な考え方を、改めて整理した上で、新しい目で中心市街地の意義を考え、その機能を再構築し、将来的に継続して機能する中心市街地を創造しました。

①中心市街地は、晴れの場から自己実現、自己表現の場へ

中心は「わたしたち・・・」

“昔は良かった”というノスタルジーに浸るのではなく、“どういう地域に住みたいか”を真剣に考え、選択することを迫られています。「快適、便利」を安易に求めた結果、人間関係を希薄化させ、社会の安定性を欠くことになりかねない世の中。短期的な便益を享受することのみに向かうのではなく、自らが考え行動することで長期的な地域の再構築を考える絶好の機会と考えます。



②自己実現表現の場と空間



かつては、晴れの場、特別の空間であった中心市街地も、上述したように、衰退の一途を辿り、結果、「この地域には、何の魅力もない、誇れるものがない」「この地域には何もない」と私たちの気持ちにも虚無感が漂ってきていました。しかし、時代が大きく変化中、中心市街地の歴史と文化は連綿と継続し、数多のキラ星となって輝き続け、私た

ちに改めて問いかけてくれました。

「本当の豊かさとは何か」「しあわせとは？」 これらの価値観により、自然と人との交わり、地域社会の絆の回復等、行き過ぎた便利さや快適さへの警鐘、その反動による回帰が始まり、私たちは気付かされました。地域を考え自ら問い直し、自信と誇りを取り戻すときが来たと。自分事としての地域を考え、何ができるか考え直すことは、地域と自分のアイデンティティを問う問題だと。

かつては“晴れの場”、これからは“日常の場”へ、“特別の時”から“普段・普通な時”へ、役割が見直され、自己実現、自己表現する時間と空間を提供できる中心市街地を、私たちは提案いたします。

2. 中心市街地の将来像

私たちの考える将来像について、地図にプロットした内容を個々に説明します。また、それぞれの項目の右肩には、前頁にある4項目「集う」「住まう、暮らす」「賑わう、楽しむ」「学ぶ、働く」のどれに該当する内容が記しました。

1) リニア中央新幹線駅とのアクセスと交通利便性の確保

a) リニア長野県駅と中心市街地を直接結ぶ専用交通線の設置 <集う・学ぶ>

リニア長野県駅に直結した専用交通線を設け、リニア駅から中心市街地へのアクセスを確保する。具体的な交通手段として、自動運転バスが第一に考えられるが、DMV（デュアル・モード・ビークル）等の新たな交通手段も考えられる。

専用交通線は、新アリーナへも直結させ、アリーナ来場者のアフター利用、新アリーナと中心市街地のまちなかMICEとの連携を可能にする。さらに、エス・バードを候補地とする信州大学新学部へのアクセスも可能とし、中心市街地へのサテライト教室の展開、教育、文化、行政等の施設との連携を可能とする。

b) リニアトランジット機能の確保と伊那谷の紹介 <集う、賑わう・楽しむ>

専用交通線と接続した中心市街地における飯田の玄関口として、JR飯田駅前に公共交通のターミナルを設け、リニア駅、地域拠点、中心市街地内との交通の結節点として位置づけ、交通の利便性を確保する。

駅前ターミナルには、専用交通線の利用者が駅前で降車することを想定し、地域市民の利用も考慮して、伊那谷を紹介する「伊那谷暮らし館」、地元企業が参画する「物産館」を設ける。ここでは、丘の上結いスクエアとも連携し、まちなかMICEやまちなかマルシェの一翼も担っていく。

c) 中心市街地への新交通システムの導入 <集う、暮らす>

中心市街地とリニア駅とのアクセスに加え、中心市街地内の移動手段として、MaaS や自動運転等の新しいテクノロジーを先進的に取り入れた新交通システムを導入する。その為に必要な5G環境等の整備も同時に行う。

来訪者、住民、勤労者、学生など全ての人にとっての移動の利便性を確保し、これまでの自動車を一人一台所有して移動することを前提とした時代からの変化を中心市街地から具現化する。中心市街地に存在する施設への利便性を高めて、まちなかMICEの展開を容易にし、点在する駐車場の有効活用を可能とする。

d) 来訪者用駐車場「通り町A Iグリーンベルト」(仮称)の設置

<集う、暮らす、賑わう>

商店・企業、まちなかイベント、新飯田文化会館、飯田市立中央図書館、飯田市立美術博物館などへ用事がある人々や、観光に来られた方が気軽に駐車可能とする為に、通り町4丁目から主税町まで、中央分離帯側両側に駐車帯を設置する。現在の4車線道路の内、2車線を駐車帯とする為、ローコストで、効果的な改修工事を実現できる。また、将来の交通事情の変化に応じた柔軟な対応が可能である。

駐車帯には、以下の利用、機能を考える。

- ・1～2時間無料。以後はA I技術により電子課金される。
- ・EV車用の充電を可能とする。(有料)
- ・自動運転時代の設備も拡張できる構造とする。
- ・中央分離帯に歩道を設け、利用者は横断歩道を渡って両側の歩道へ移動する。駐車帯から歩道への直接の横断は禁止する。

駐車利便性の高い場所がまちの真ん中に生まれることにより、空き地や空き家のリノベーションや事業所の立地等、これまで駐車場併設がネックになっていたきめ細かな活用が進めやすくなる。

e) 既存駐車場の有効活用 <集う、暮らす、賑わう>

自動運転等の新しい交通システムの進展、シェアリングの拡大の中で、自動車の所有は減少すると言われ、さらに中心市街地に新交通システムが導入される中で、駐車場の必要台数は低下していく。その場合に、グリーンベルトのエリアについては、容易に縮小することができる一方、中心市街地に存在する多くの駐車場の活用が大きな課題となる。

スマホでの予約システム等により、利便性を上げると共に、まちなかMICE等での新たな利用場面での活用を図る。また、中心市街地全体の都市計画の観点

から、新たな展開の為の貴重な用地として、駐車場以外への転用を図っていく。その為の土地交換による有効活用を促進する政策も講じていく。

f) 南信運転免許センター(仮称)の活用 <集い、賑わい>

南信運転免許センター(仮称)が現飯田警察署と隣接するエリアに設置されることが決定した。南信地域に於いての利便性が向上することになるが、それだけに終えることなく、周辺への波及効果を得ていくことでなければならない。今後具体的な対応を検討していくとして、まずは利用される皆さんが二次的に利用できる店舗、施設を地域として発信して、賑わいにつなげる。

また、予定地に含まれる風越公園については、最小限の縮小に留め、貴重な都市公園として活用していく。

2) まちなかMICEと賑わいの創出

a) 飯田下伊那の文化の中心となる新飯田文化会館(仮称)の駅前誘致

<集う、賑わう、学ぶ>

飯田市の言う「都市重心」の機能を中核的に担う施設として、飯田文化会館を中心市街地に設置する。JR飯田駅前に新飯田文化会館を設置し、市民が「観る・創る・参加する」文化のハブ施設として、街の楽しさ、ときめき、連続性を生み出す拠点として位置づけ、以下の機能を設ける。

- ・ 大・中・小のホールを設ける。
- ・ 演奏や鑑賞するだけでなく、録音スタジオや撮影スタジオとして活用することを可能とし、創造の場とする。

新飯田文化会館は、まちなかMICEの中核施設として、会館内の施設を常時利用して市民交流ができる場とし、丘の上結いスクエアと連携することで、より幅広い活用を図っていく。さらに、中心市街地内の会議室、飲食店、宿泊施設との連携を図り、まちなかへの人の流れを生み出し、人と人が知り合い交流するまちなかMICEの充実・拡大につなげていく。

また、川本喜八郎人形美術館と連携する中で、人形劇場としての機能も高め、飯田下伊那の人形浄瑠璃等の歴史を含めた人形劇に関する展示を行い、人形劇の定期公演を目指して公演頻度・内容を充実させ、人形劇のまちとしての中核機能を担っていく。

アクセス面については、現在の車中心の社会から、公共交通、新交通システム、自動運転等の将来的な利用拡大を想定して、以下の機能を設ける

- ・ 駅を挟んだ西口側に立体駐車場を設置し、文化会館とはペデストリアンデッ

キ（歩行者専用的高架建築物）で結ぶ。

駐車場台数は、将来的な利用状況を想定して算定する。イベント時には周辺の民間駐車場の一時利用も検討する。

- ・ 西口駐車場へのアクセス道路を整備する。
- ・ J R 飯田駅の西口としての機能を併設する。
- ・ J R 飯田線、新交通システムとの連携により地域拠点からのアクセスを改善する。
- ・ J R 飯田駅、駅前ターミナルからの徒歩移動ルートを整備する。

飯田線を利用して、新飯田文化会館を訪れ、音楽や劇を鑑賞した後、歩いて移動し、まちなかM I C E で、飲食を伴った交流をして、体験した文化・芸術について語り合うことが人生を語り合うことになる。その様な時間軸で余韻が楽しむことができる場所は中心市街地の大きな役目であり、中心市街地でしかできない。人と人の交流が文化の厚みを増していく。

b) 緑の公園軸線「並木通りと中央公園」 <集う、暮らす、楽しむ>

『通り町A | パーキングアベニュー』は中心市街地を縦に結ぶ車利用の利便性を高める軸線とするのに対し、りんご並木から桜並木で形成される並木通りは車の通行を規制・抑制した細長い公園軸線として、中央公園は谷川が流れる環境・文化の公園軸線として位置づける。特徴ある軸線が中心市街地を縦横に結び、魅力と利便性を高め、飯田の顔となる。

並木通りは、四季の広場～飯田動物園～通り町～結の広場～大宮諏訪神社をつなぎ、各種イベント（週末シールドガーデン、まちなかマルシェ、まちなかファーム、まちなかキッチン等）や、文化活動、お祭り、交流の場所等の中心市街地らしい華やかな雰囲気を生み出し、まちなか観光の拠点となっていく。

中央公園は、両脇の側道である市道谷川1号線と2号線を一体的に整備・活用し、屋台やキッチンカーが立ち並ぶ、様々な交流を生み出す拠点としていく。公園の一部を親水公園化して、市民が憩える場を設けていく。

並木通りと中央公園が交差する広場は、最もポテンシャルが高い場所の一つであり、飯田を象徴する都市景観を発信する場所として、人形とけい塔「ハミングパル」を中心に丁寧に美しく整備され、豊かで活気ある活動が繰り広げられる場としていく。

飯田市民の心のシンボル「りんご並木」を育む心はまちづくりの原点である。緑の公園軸を構成する並木通りと中央公園は、潤いと安らぎに満ちた市民生活の象徴として日本一の緑の軸線に育てていく。

c) 結いの広場 <集う、学ぶ、賑わう>

飯田市公民館跡地、プール跡地、中央公園に、可能であればN T Tを含めたエリアを結いの広場として活用する。

結いの広場には、「スポーツ健康センター」「コンベンション・ガーデン」を併設し、市民活動の礎として位置づけ、街の複合的な活性化を図る。

i) スポーツ健康センター <集う、賑わう、暮らす>

市民の健康を主眼にした施設として、長寿時代を市民が健康で楽しく過ごしていくために、食・健康・趣味等幅広く、学び、指導し、交流し、自ら活動できる設備や機能を整えた場とし、中高齢者やスポーツをしない人も気軽に訪れることができる場としていく。

また、中心市街地で行われるイベント本部などのバックオフィスとしても、市民活動の場としても利用可能とする。

ii) コンベンション・ガーデン <集う、賑わう>

プール跡地に美しい曲線をもった屋根を有した屋外催事場（コンベンション・ガーデン）を設ける。魅力的な空間は飯田の文化的高さを象徴する。

屋根付き屋外施設ができることにより、天候に関わらずイベントが企画できるようになる。また、屋外イベントでも雨天の場合の代替会場として活用できる。その結果、「中心市街地でなら確実にイベントが行える」という安心感が広がり、りんご並木や桜並木などでの野外イベントが活発化し、さらにまちなかでのイベントが活性化する。

また、スポーツ健康センターとの連携で、「スポーツ健康広場」としても日常的に機能させることで、街の複合的な活性化を図る。

d) 集いの拠点（ミニマム・ベース） <住まう、働く、賑わう>

街の魅力は「人々が出会い、人々が交流する場」に容易になり得るところにあり、これが「まちなかM I C E」の根幹である。そうした魅力を生み出す為に空き店舗・空き家・空き地をリノベーションし、創造的利用を促進し、居心地のいい空間を創り上げる。

特に空き家や店をやめた店舗併用住宅等は、居住部分をコンパクトにすることで活用スペースを生み出すという飯田なりの手法をシステム化する。

通り町A Iパーキングアベニューができることによって、駐車場からの距離でこれまで活用が進まなかった裏界線沿いや、駐車場が無い空き家も積極的に活用できるようになる。

「集いの拠点」の運営は、やる気のあるプレイヤーが費用を掛けず行えるようなくみを用いる。特に若者の参加が中心市街地の活性化には必須であり、まちなかで自分のやりたい事ができる希望がまちを元気にしていく。ニッチなジャンルの店舗が生まれることで、まちに面白みが生まれ、多層で多重な交流が生み出されていき、既存店舗においても、利用していなかったスペースをまちかど図書館やフリースペースなどとして活用が始まるなど、面白みが加速する。

また、用事がなくても人々と交流しまちなかの時間を楽しめる場所や、大人の目が届く場所で安心して勉強ができたりする場所等は、今後の中心市街地の過ごし方として注目したい。

e) バックアップオフィスと事業所・企業の立地の促進と情報インフラの整備

<働く>

首都圏直下型地震等の大規模災害の発生が予測される現在、国の中枢機能のバックアップが求められている。「リニア新幹線駅と直接結ばれた専用交通線」によって都市部と一体となった中心市街地はその役割を担うことができる。中心市街地は歴史的に地震による災害にあったことはなく、バックアップオフィスには最適である。このことは、東京に本社を構える大企業にも同様にあてはまる。

JR飯田駅西口側にバックアップオフィスの駅近のモデルケースをつくり、また昼間の人口を増やすために中心市街地へサテライトオフィスを含めた事業所・企業の立地を呼び込む。

オフィス機能の為には、情報インフラの整備が必須となる。Wi-Fiや5Gの環境を中心市街地に整備する。

3) タウンキャンパス～学びのまち <学ぶ>

中心市街地全体を教育の場として、先進的な学校教育から、地域にある施設や歴史を活かした社会教育、生涯学習まで展開するタウンキャンパスとして位置づける。先に述べた新飯田文化会館、丘の上結いスクエア、まちなかMICEもその機能の一翼を担っていく。

また、タウンキャンパス化の中心機能として、外部教育機関の立地に対応可能な一定の広さの用地を中心市街地に確保していくことを検討する。

a) 自然史博物館と風越山のフィールドワーク

i) 観光スポット「風越山」 <楽しむ、集う>

「リニア新幹線駅と直接結ばれた専用交通線」は飯田市の象徴・風越山を観光スポットに変える可能性を高める。風越山への信仰の道を登り、天竜川が底

に流れる日本一の谷と南アルプスを見渡せる絶景のビューポイントとして、東京近郊住民のハイキングコースとなっている高尾山のように、東京や名古屋から気軽に登山やハイキングを楽しめる観光スポットに風越山をしていく。

郊戸八幡宮、白山社（奥宮、里宮）を基軸に、かざこしこどもの森公園、風越山麓公園、今宮球場を含めて、「風越山コース」「虚空蔵コース」「こどもの森公園コース」など、来場者が自分の体力にあわせて選べる登山・ハイキングコースを各種用意する。

ii) 風越山クライミングステーション <楽しむ、集う>

新飯田文化会館がＪＲ飯田駅前等の中心市街地に建設・移転後、現飯田文化会館跡地に風越山登山・ハイキングのベース施設を設置し、ここで全員が登山者登録して、出掛けていく。館内には、更衣室、浴場、売店、案内所が設けられ、登山やハイキングの前後を過ごすことができる。

さらに、ステーション内には屋内フリークライミング設備が設けられ、初心者から国際基準までのコースが用意され、国際大会も可能な施設とする。日本全国から競技者が集まる一方、初心者にはインストラクターが指導を行う体制を整える。

リニア駅との専用交通線は飯田駅を經由して、クライミングステーションまでの直通コースが用意される。車での来訪も考え、駐車場を用意する。

iii) 自然史博物館 <学ぶ、楽しむ>

旧飯田文化会館跡地に自然史博物館を計画し、飯田下伊那の自然と暮らし、歴史を学べる常設展示を行う。特に奥深い南アルプスや、自然と共に生きる知恵を持つ伊那谷の人々の暮らしは、日本人の生きてきた証を現代に残し、リニア時代最大の観光資源と言える。

b) 学びの広場（タウンキャンパス）<学ぶ、賑わう、暮らす>

少子化は戦後教育の中で組み立てられてきた教育の在り方を考え直すきっかけとなっている。一つには、学校の統廃合であり、もう一つには、小中高における学力の全国的な格差の解消である。また、四年制大学の設置は当地における長年の悲願である。リニア時代を迎える飯田市では、東京や名古屋の周辺地域という時間的な立地を踏まえながら、地元にいながら一流大学や本格的なクリエイターを目指せるチャンスを生み出すためのハイレベルな教育の機会を中心市街地に設ける。

東京、名古屋、関西との時間距離が短縮され、ICT教育が推進される中で、信州大学以外の大学の移転、信州大学を含めたサテライト教室を中心市街地に設

置する。

飯田市では小中連携・一貫教育を推進しているが、中心市街地に飯田下伊那の一貫教育のモデルともなる一体型の小中一貫校を設置する。

それにより不要となった校舎・敷地を活用では、高等学校の再編の動きの中での中高一貫校、小中高一貫校の開設、前述の大学誘致、社会教育・生涯学習等、新たな人材育成の拠点や市民活動の拠点としての整備をする。これらの中ではハイレベルな教育を行うと共に、地域拠点や企業とも連携したフィールドワークを取り入れた教育を行う。また、これらの学校と施設には公共性を持たせ、市民がキャンパスを日常的に使えるようにし、街と融合した学校とし、中心市街地の賑わいにつなげる。

c) 市民活動による教育、文化創造拠点と飯田城の活用 <学ぶ>

中央図書館、美術博物館に、追手町小学校、消費生活センターの活用を加えて、市民の教育、文化活動の拠点とする。

中心市街地の交通の利便性が向上することにより、中央図書館、美術博物館の利用率が飛躍的に伸びることが見込め、これまで見られなかった文化的な市民活動が多種多様に行われるようになる。

飯田城の史跡を活用した歴史的な城下町としての市民教育、観光の取り組みを行うと共に、V R技術で飯田城を再現、最終的には飯田城の復活を目指す。

d) 寺町散策と歴史の街並みの活用、伝統行事の継承 <学ぶ、集う、賑わう>

古い町並みが残り、歴史のある寺院が集積している橋北地区では、春草通りが整備され、旧測候所のライトアップなどの取り組みが行われているが、歴史的なインフラを活かし、寺町巡りのまちなか観光などのスポットに育てる。また、伝統的町並みへのリノベーションを行い、空き家や空き地を活用し、歴史を感じる地区にする。

人形劇フェスタ、丘のまちフェスティバル、獅子舞フェスティバルなどの新しいイベントを生み出し、育てていくと共に、地域に残る伝統的な祭典、イベントを継続することが重要だ。七年に一度のお練りまつりでは、東野の大獅子や大名行列に代表される伝統を守り、各神社の秋祭りなど継承していく。橋南・橋北地区でのお練り祭りの山車や本屋台の復活への取り組みも連携して進める。

e) 四季の広場と動物園 <集う、賑わう・楽しむ、学ぶ>

全国的にもきわめてユニークな市内動物園が更にグレードアップされ、四季の広場まで拡張され、動物たちの運動コースが造られる。散歩時間になると動物たちが歩く様子を多くの人達が見に来る。

また、動物園と周辺の自治体や商店をはじめとする連携を進め、現在実施されているいいだ丘のうえ朝市やりんご並木でのイベントなど、まちなかマルシェをはじめとする取り組みをさらに活発化し、りんご並木の公園化、店舗・施設の充実と並行して、りんご並木や中心市街地との回遊性を高めていく。

4) 若者から老人までが暮らすまち <暮らす>

a) オフィスと福祉と暮らしが共存するまちへ

公園通りとして桜並木が再整備され、りんご並木から大宮諏訪神社をつなぐ公園軸線として快適な都市環境を生み出し、中心市街地がオフィスや住居が絶妙に混在した“住みたくなる”地区となる。空き家をリノベーションしてオフィスが設けられて、多種多様な業種が混在する地区となり、居住者も増加する。

また中心市街地には福祉施設も多い。お年寄りにも暮らし易い地域として、生活に密着した暮らしの充実をはかる施設を中心に据え、施設と企業と住民が連携した地域づくりを実現する。

b) 若者の暮らすまちへ <暮らす、集う、賑わう>

リニア駅からエス・バードへの専用交通線が新たに整備されることで、信州大学新学部の学生の通学が容易になることから、中心市街地に学生向けの住宅、居住施設を設ける。学生にまちなか居住という居住地域の選択肢を広げ、地域活動への参加・協力を求め、中心市街地のまちづくりに活気を注入する。

また、空き地、空き家と中心市街地に起業や居住を希望する若者とをつなぐ機能を確立し、若い力での起業を促進し、新しい様々な流れを生み出すと共に、居住を前提に支援策を講じて、移住を実現して、人口増加に繋げていく。

5) 多様な、独自の食文化が味わえるまち

a) 多様な食文化の発信 <集う、賑わう・楽しむ、働く>

飯田下伊那には、多様で特色ある食文化が存在しているが、お店が集中しているのが中心市街地である。伝統ある五平餅や飯田発祥のネギだれおでんなどに加えて、最近では飯田市を「焼肉のまち」として売り出している。ラーメン店、蕎麦店、特色ある和洋食店や、居酒屋をはじめお酒を楽しめる店など、多様なお店が存在している。また、菓子産業も盛んで、和菓子を中心に、洋菓子、ベーカリーなど、個性あるお店が点在し、飯田下伊那で生産される半生菓子も小売店舗で購入できる。漬物、味噌、醤油、お酒などの昔からの醸造品に加え、シードルも中心市街地で製造している。

これら食の存在は、まちなかM I C Eの重要な機能を果たすと共に、外部から

の交流人口の増加にも大きく寄与することができる。その為に、個々をネットワーク化して、発信力を高め、来訪された方々が楽しめる企画を協力して考え、打ち出していく。

b) 食による賑わいへの貢献 <集う、賑わう・楽しむ>

現在、丘のまちバルをはじめとして、食をキーワードとするイベントが開かれている。りんご並木の歩行者天国をはじめ、多くのイベントに、従来の屋台に加えてフードトラックの出店が見られるようになってきた。何れも賑わいを見せており、ますます食の役割が増してきていると言える。既存のイベントを見直し、食をさらに活かし、そこに新たなイベントを加えて、賑わいを高める。

また、イベント外の場所や時間でも、中心市街地の空間利用を考える中で、空き駐車場の活用や、企業、店舗、公共施設等とのコラボによりフードトラックの出店の可能性を広げて、屋台村のような賑わいを創出し、中心市街地に行けば、食を楽しめる環境を作る。

<おわりに>

中心市街地は地域拠点に比較して個性が強いのかもしれないが、飯田市の顔となる中心市街地と、深い文化や伝統の上で伊那谷の豊かな暮らしが溢れる地域拠点、飯田の新しい玄関となるリニア駅のある「交流重心」、居住や商業機能等を担う「人口重心」が連携し、役割分担することにより、リニア時代の豊かな飯田下伊那が表現できると考えます。

今までのまちづくり論議は多くの意見を集めての積み上げ型で行われて来ました。しかし、意見を集約すればするほど内容は凡庸になります。科学的な立証法では、まず専門家による仮説があり、実験によりそれを確かめていく方法が採られます。確かな方向性があるこそ、実験中の発見で新たな物証も見つかっていきます。今回の提案も、飯田をよく知り、中心市街地を愛するメンバーによる科学的な立証法での〈仮説〉であると共に、リニア時代への危機感を表して、検討を重ね、修正を加えててきました。

長い時間の経過の中では、今回の提案の場所の一つ一つは必ず更新が必要となる時期を迎えます。その時に行き当たりばったりで整備してしまうのではなく、将来の方向性を官民が共有して連続性を持ちながら整備していくことで、確かな街の将来を築いていくことができると考えます。

多くの方々に、この仮説を共有していただき、時代の変化の中でさらにブラッシュアップし、仮説から具体へと展開することを期待しております。

※1 ピーター・カルソープは アメリカ合衆国のサンフランシスコベースの建築家、都市デザイナー、都市プランナー。彼はニューアーバニズム理論の先駆で持続可能な建築の実践を推進し、1992年に形成されたシカゴベースでのニューアーバニズム推奨団体の創設メンバーである。

3-a)自然史博物館と風越山のフィールドワーク

3-a-3) 自然史博物館 伊那谷の暮らしと自然の紹介
文化会館跡地に伊那谷の自然を学ぶ拠点立地
風越山全体を自然と神が宿るエリアに
日帰り登山の人気スポットに
3-a-2) 風越山クライミングステーション(登山道の整備等)

2-e)バックアップオフィス、国の中枢機能のバックアップ

3-a-1)観光スポット「風越山」

- ・低未利用地の活用
- ・人形劇のテイスト
- ・飯田駅西口との連携
- ・中心市街地『まちなかMICE』のメイン施設

飯田駅西口の新設

1-b)リニアトランジットと伊那谷の紹介

- ・リニアとの接続するバスターミナル
- ・自動運転バス、市内循環バス
- ・伊那谷暮らし館・伊那谷物産館

丘の上結いスクエア

- ・大交流時代に向けての新たな交流の軸
- ・賑わいの再生
- ・交流と学び
- ・情報発信の拠点
- ・ヒト、モノ、コト

2)まちなかMICE

- ・新文化会館と結の広場をメインとしたリニア時代のまちなかコンベンションの展開
- ・飯田らしい人情の交流

1-d)通り町AIグリーンベルト



2-C-2)コンベンションガーデン



2-C-1)スポーツ健康センター

- ・屋内イベント広場
- ・テントのある催事場

2-C)結いの広場

- ・新たな機能(健康、多世代スポーツ、交流、アート、学習等)を付加した、出会いの広場

2-d)Minimum base

裏界線露地の魅力

横丁展開

1-d)通り町AIグリーンベルト

2-d)Minimum base

裏界線露地の魅力

横丁展開

2)まちなかMICE

2)まちなかMarche

2-e)事業所、企業の立地

週末シールドルガーデン

3-e)四季の広場と動物園

- ・丘の上一番の集客力をまちづくりに
- ・動物園+四季の広場=公園動物園に進化、ビューポイント
- ・子育て世代に向けた再整備
- ・街中との連携、展開、

1-C)中心市街地への新交通システムの導入と5G環境の導入

2-e)バックアップオフィス、事業所、企業の立地促進

ビューポイント

4-a)オフィスと福祉と暮らしが共存するまち

- ・住みたくなる地域へ福祉の充実
- ・空き家の再利用
- ・事業所の立地

1-a)リニア新駅との直結

- ・上郷リニア駅に直結した専用新交通線
- ・新アリーナと中心市街地とのMICE連携
- ・新アリーナのアフター利用が出来る
- ・エスバード教育機関へ



3-b)学びの広場 タウンキャンパス

- ・小、中、高 一貫教育の拠点
- ・学校統廃合
- ・高度教育の実現(大学誘致)
- ・公共施設の移転
- ・移住、定住、二地域居住の教育不安解消
- ・地域拠点屋外教育との連携
- ・学びを街中全体に広げる

1-f)南信運転免許センター(仮称)の活用

民間空間のユニークベニュー

学びのサテライト教室

3-d)寺町散策と歴史の町並みの活用、伝統行事の継承

- ・城下町の町並み
- ・伝統的町並みへのリノベーション
- ・空き家、空き地の活用
- ・福祉、暮らしの充実
- ・寺町巡りのまちなか観光
- ・一本サクラ巡り



15年後の賑わう中心市街地への市民提案 Ver-4,3 「人々が集い、つながり、夢が広がりりんご並木の心が育まれ、自然、文化、歴史が息づく結いのまち・いいだ」

- 15年後の「なりたい未来」「あるべき姿」を創造する
- 1.新しい中心市街地の創造
 - 2.中心市街地の将来像
 - 1) リニア中央新幹線駅とのアクセスと交通利便性の確保
 - 2) まちなかMICEと賑わいの創出
 - 3) タウンキャンパス~学びのまち
 - 4) 若者から老人までが暮らすまち
 - 5) 多様な、独自の食文化が味わえるまち

3-c)市民活動による教育、文化創造広場、飯田城の活用

- ・追手町小学校の活用
- ・図書館、美術博物館との連携
- ・市民文化活動の拠点
- ・歴史的な町並みの復活

丘の上ビューポイントの活用